言語コミュニケーション力と英語授業
課題レポート

B07■■■■
英語文化系コース
須部智也

Ⅰ　はじめに

本レポートは、柳瀬陽介のブログ「英語教育の哲学的探究」に収められた記事『文法獲得と集中的入出力訓練（2002/9/23. 11/18、12/23 一部修正）』、『集中的入出力訓練に関する追記（2002/11/18. 12/23 一部修正）』、および『集中的入出力訓練(Intensive Input/Output Training)の具体的方法に関する整理（2002/12/23、以後随時修正・追加更新）』(URLは３つともにhttp://ha2.seikyou.ne.jp/home/yanase/inservice.html)を参考に、ビデオで鑑賞した蒔田守の授業を主に英語の入出力の観点から分析・考察することを目的とする。

本レポートの動機は、自らの卒業論文のテーマが音読に関わるものであることからの関心と、なぜ蒔田の授業では効果的な音読が達成されていたのかを客観的な視点で分析したいという思いからである。

そのために、まず柳瀬が「集中的入出力訓練」を提唱する理由と定義、その他留意点などについてまとめる。次に、ビデオで鑑賞した蒔田の授業の流れを確認し、最後にその中での随所の活動をピックアップし集中的入出力訓練や留意点などと照らし合わせながら意義を見出したり所見を述べたりする。

Ⅱ　集中的入出力訓練(Intensive Input/Output Training)

（1）集中的入出力訓練提唱の理由

柳瀬はまず、言語を獲得する上で「学校文法・伝統文法という外的表象を学ぶことと、文法の内的表象形成の間には、一層のこと直接の因果関係はない」、つまり極端に言えば、学校で文法などを学ぶこと(脳のニューラルネットの状態まで考慮されていない授業など)と英語獲得に直結的な関係はないとした。そして、チョムスキーなどの合理主義者寄りの立場を明らかにした上で、内的表象としての文法の働き(言語を獲得するために脳を「慣れる」状態にすること)について積極的に主張している。そのために、意味と音が構造的に結合した表現としての音の入力を続けていれば、生得的に存在していた脳の状態は、その言語に適した内的表象としての文法をやがて獲得するのではないかと示唆する。

(2)定義

柳瀬は集中的入出力訓練を「外国語の習得において、与えられた入力を、そのまま出力することを、意識的に何度も繰り返す訓練」と定義している。ただしその入力は前項でも述べたように、意味と音が段階に応じた複雑さでもって構造的に結び付けられていることを要件とするとしている。また、歌やシャドウイング・音読も入力した言語を即出力する点で集中的入出力訓練だとしている。

（3）留意点

柳瀬はその他、主張を支持するためシャドウイングや音読に関して以下の留意点等も述べている。

・音声入力→音声出力(たとえばリピーティングなど)と視覚入力→音声出力(たとえば音読)では、まずは音声入力→音声出力を優先し、音声言語の獲得が安定し、かつ、書記言語の獲得の必要性が生じるにつれ、視覚入力→音声出力が徐々に導入されるべきである

・英語の音がきちんと口頭で再生できるようになってから、綴り字から音声への変換という作業を含む音読へ進むべきではないか

・まともな音読をするために大切な条件として以下の４点が挙げられる：

(1)再生する以前に、まず英語の音（発音・リズム・イントネーション）に関するイメージができていること

(2)年齢や才能などの要因により新たな外国語の英語の発音を聞き分けそれを再生できるだけの能力をもっているか、そうでない大部分の場合は新たな調音の仕方が十分にコーチされていること

(3)フォニックスの原則が直観的に把握されているか十分教えこまれており、フォニックスの原則が通用する多くの単語に関しては自力で発音できること

(4)英語の綴りと音声の同時提示などが繰り返されて、音読しようとするテクストの単語の綴りと音声が、フォニックスの原則では解決しにくい単語も含めて、十分に結びついていること

・集中的入出力訓練とは別に、音節(phoneme)に関する体系的な指導がなされるべきだ

・音素・音節を超えた発話レベルでの音の変化、リズム、イントネーションについても、学習者は必要に応じて明示的な教示と訓練を受けるべきだ

・シャドウイング・音読ともに学習者の能力や学習環境を考慮したり、英文の特徴を理解したりした上でバリエーションを持たせて指導するべきである

Ⅲ　蒔田による授業の流れ

この章では、次章での分析に役立てるため、ビデオの中で蒔田が行っていた(ビデオに収められた部分の)授業の流れを学年別に確認する。

（1）中学１年生の授業

①教科書を開く前に新出単語・句を黒板に書き出し、教師の後にリピートをして発音

②新出単語・句を CD のリズムに合わせて教師の後にリピート

③新出単語・句を CD のリズムに合わせて生徒のみで発音

④新出単語・句を CD のリズムに合わせて指名された生徒が発音
⑤教科書を開き、本文をリスニング
⑥教科書本文を CD のリズムに合わせて教師の後にリピート
⑦教科書本文を CD のリズムに合わせて生徒のみで音読
⑧教科書本文を CD のリズムに合わせて指名された生徒が音読
⑨教科書本文を導入で用いた CD(今回は「古畑任三郎」のテーマソング)を流しながら生徒のみで音読
⑩教科書本文を教科書を見ずに音読

(2)中学２年生
①教科書本文を CD のリズムに合わせて教師の後にリピート
②教科書本文を CD のリズムに合わせて生徒のみで音読
③読み聞かせ活動…指名された生徒２人が、教科書本文をクラスに読み聞かせる。その際、教師は選曲した BGM(今回は Le Couple「ひだまりの詩」カラオケバージョン)を流し、発表する生徒は本を聞き手に向け内容が表現されるように音読する

(3)中学３年生
音読発表…夏休みに２・３年次の教科書の数ページを音読練習し、一人１分ずつできるだけ暗唱で発表。自分の発表をテープに録音し復習も兼ねる。顔を上げ表情に注意させ、聞き手を意識した読みを促す

編集で切られた活動等がある可能性があるが、ビデオに収められた活動の流れや内容は以上である。

Ⅳ　活動の分析と所見

この章では、蒔田が行った授業の随所の活動をピックアップし、集中的入出力訓練の観点や柳瀬による留意点を参考にしながら意義を見出したり所見を述べたりする。

(1)中学１年生の語句指導に関して
まずⅢ(1)①～④にもあるように、蒔田は新出単語・句の発音を何度も何度も繰り返す。単に繰り返すだけでなく、listen and repeat、生徒独力、生徒一人と認知的負荷が段階的に大きくなるようなバリエーションを持たせて定着を図るよう設計されている。
これは何度も繰り返すという点でまさに集中的入出力訓練の原理にかなっている。さ

らに、教科書に入って音読をする前に音と意味をしっかりと結び付けているという点で、「英語の音がきちんと口頭で再生できるようになってから、綴り字から音声への変換という作業を含む音読へ進むべき」という留意点にもかなっていると思われる。学習者の発達の仕方を理解した結果選ばれたと思われるバリエーションも非常に効果的である。

ここで驚いたことは、予習をしていないにも関わらず、新出である「get up」という動詞句の発音をｔとｕのリンキングを意識してできていたことである。既習のフォニックスの知識を応用したようだが、「フォニックスの原則が通用する多くの単語に関しては自力で発音できること」という柳瀬が提唱する音読のための条件が整えられていたということである。蒔田による普段のフォニックスの指導や生徒による練習、が生徒の中で知識の内在化がされたまさに入出力の賜物であろうと思われる。こうした条件が整った上でなされる音読ならば、そうでないものと比較して何倍も効果を発揮するのではないか。

(２)中学１年生の音読指導に関して

語句指導同様、音読もかなりの回数をこなしている。Ⅲ(１)⑤～⑩にあるように、リスニングに始まり語句指導と同じ手順で繰り返す。教科書の文字を入力し音声によって出力する作業を繰り返して定着を図っている。

これぞまさに集中的入出力訓練であるが、普通このように何度も何度も同じ英語を音読するという活動は、バリエーションを持たせるだけではやはり単調で飽きてしまうのではないか。そこで蒔田はBGMを用いてリズムに合わせて読ませる。ただし単にBGMを用いるだけではなく、リズムに合わせる用のものと導入で用いたものとを使い分けている。前者はリズムによって発声および記憶させやすくする、後者は前者の目的に加え生徒の気分を変え動機づけを保つ目的であろうと思われる。

やや分析から逸れるが、中２の読み聞かせ活動のBGMに関しても同様であるが、蒔田は適したBGMを選んで使用したり、普段から厳選してストックしたりなどの努力をしているという。毎回、教材や生徒観に合った教具を選択するのは骨の折れることだが、生徒の英語力を効果的に高める構成要素の一つとして考えれば非常に大切なことでもあるので、当然だが見習わなければならない努力だと思った。

(３)中学２年生の読み聞かせ活動に関して

この活動自体においては音の「繰り返し」はなされてはいないが、この活動に至るまでに多様な指導がなされていたことがうかがえる。生徒の音読を見聞きするからに、イントネーションやリズム、調音など音読に関して生徒がかなり理解した上でアウトプットしているように思われた。そういったことについて個別の指導がなされているのであろうか。少なくともビデオ中に発表していた生徒は、柳瀬の提唱する音読の条件それぞれを８割方クリアしているような印象を受けた。

入出力の観点以外で興味深かったのが、コミュニケーションを意識した活動であると

いう説明がテロップで示されたことである。ふつう「音読」「読み聞かせ」と聞けば読み手一人の読み、あるいは読み手から聞き手への一方通行の読みをイメージする。しかし蒔田は、本を聞き手に向け、聞き手を意識した読みをするよう指導することで「聞き手とのコミュニケーション」を持たせるようにしている。「読み聞かせでコミュニケーションをすることだってできる」ということを生徒に気付かせる発想は、できそうでできないが、できたとしても生徒の音読の力がなければ理想で終わってしまいかねないと思われる。読み聞かせ活動という発想から入るのではなく、「音読」や「コミュニケーション」について考えがなければ実現が難しい、ハイレベルな授業だと思った。

（4）中学３年生の音読発表に関して

この活動を見て、もはやこれは集中的入出力訓練の産物でありお披露目の場であると思わざるを得ない。生徒はおそらく夏休みに教科書の発表部分をひたすらに音読・暗唱練習してきたのであろうが、それだけでは出来得ない発音やリズム、イントネーションなど(英語自体の正確さ)を持っていたし、適切な音読スピードや文強勢、感情表現など(英語を読む際の適切さ)をも持ち合わせていた。一般的に、正確さにしろ適切さにしろ読み方がわからない生徒は英語らしく音読することができない。しかし彼らは英語の音を非常に上手に出せていたし、テキスト自体を十分に理解し発表に適した読み方を選択出来ていた。これは主に前者は３年間の指導の積み重ね、後者は夏休み前のテキストの読み込み(ひいては同様に積み重ね)によるものであろう。映像には実際に映っていずとも、大量の入出力作業があったことが想像される。柳瀬による音読の条件等をほぼ全て満たした状態で読んでいる印象であった。

発表をしている３年生を見ていて、彼らが一人での音読ではなく英語で自由に会話をしている場面を見てみたいという感想を持った。かなりの入出力作業が見えるだけに、それが実際の会話の中ではどう作用するのかが気になった。やはり、教科書の主に会話文で使われている表現などが即座に出てきて、英語らしい音が流暢に飛び交うのであろうか。それとも、彼らの大量の入出力は音読や発音に重点が置かれ、実際の会話では期待より機能しないのであろうか。蒔田の普段の授業等も見てみる必要はあるが、音読以外での彼らの活動に興味を持った。

Ⅴ　まとめ

柳瀬の提唱する集中的入出力訓練や音読の条件等を中核に添えて蒔田の授業を見てみると、入出力の重要性が見えるように思った。２年生の読み聞かせにしても３年生の発表にしても、並大抵の入出量ではあのような結果は出ないであろうと思う。低学年の頃から、いわゆる「内的表象としての文法」獲得を意識した合理的な指導が成果を出しているので

はないかと予想される。

もちろん蒔田個人の持つ指導技術や生徒指導力、英語力などが大きく作用しているであろうし、生徒観や学習環境、教材・教具によって影響を受けることもあるであろうから「蒔田の実践を真似すればよい」「とにかく入出力」という結論で以て実践してしまっては結果は見えているだろう。ただ、こういった理論や実践があることを念頭においた上で適切なレベルや形態を選択して入出力を繰り返すことで、それに見合った成果が(主に音読においては)得られるのかもしれない。